

## 四国防災八十八話

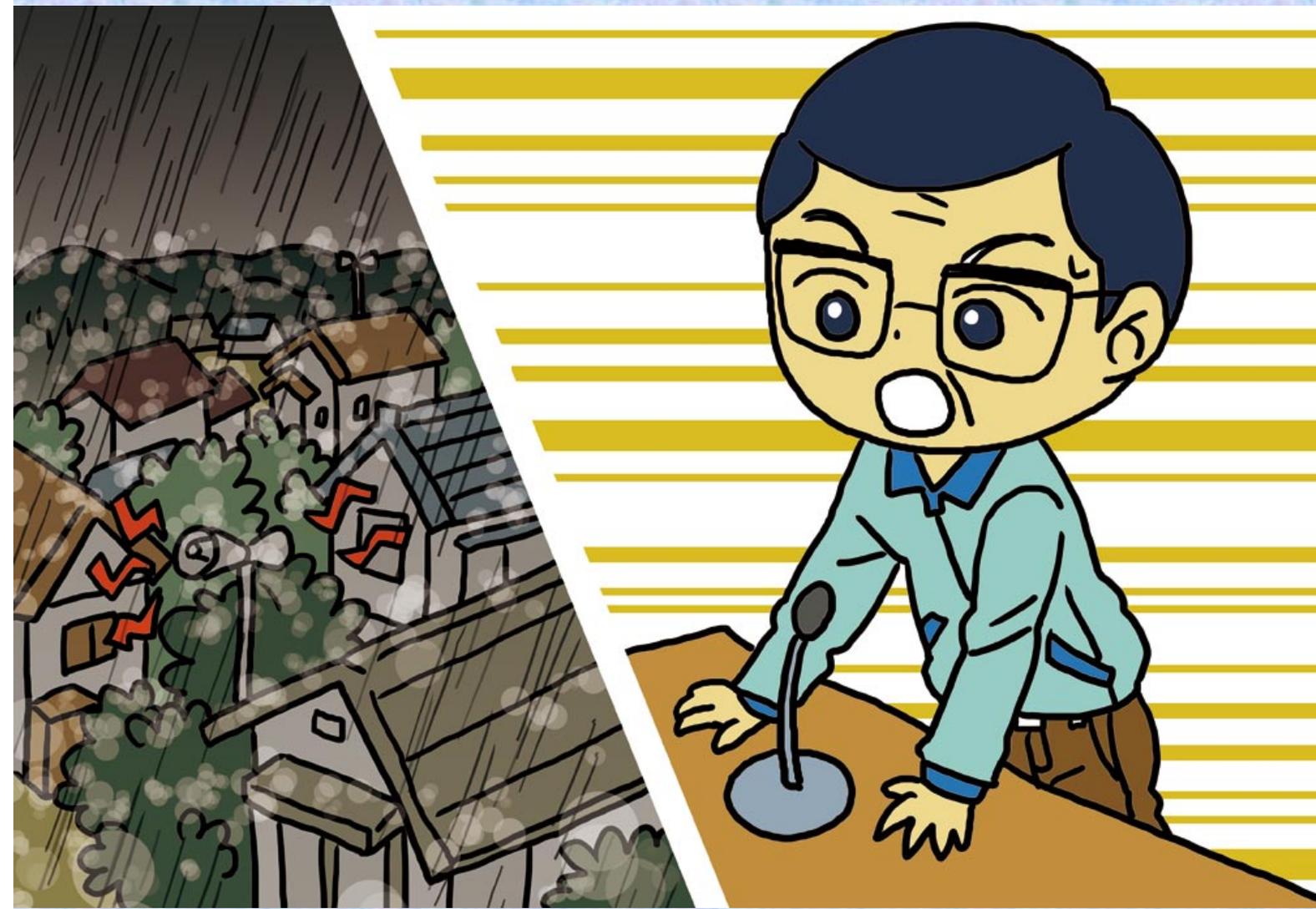
### 第五十一話 救ったのは人のつながり

監修・著作：愛媛大学防災情報研究センター

作画：岡野 小夏

**平成13年9月初め、  
秋雨前線の影響で、高知県西南部では  
集中豪雨が発生しました。**

**私は、当時、土佐清水市下川口浦地区の  
区長をしていました。**



明け方近い午前4時頃、  
下町から浸水したとの連絡を受け、  
私は、下町と中町に  
避難命令を出すことにしました。

早速、町内へマイク放送で呼びかけました。

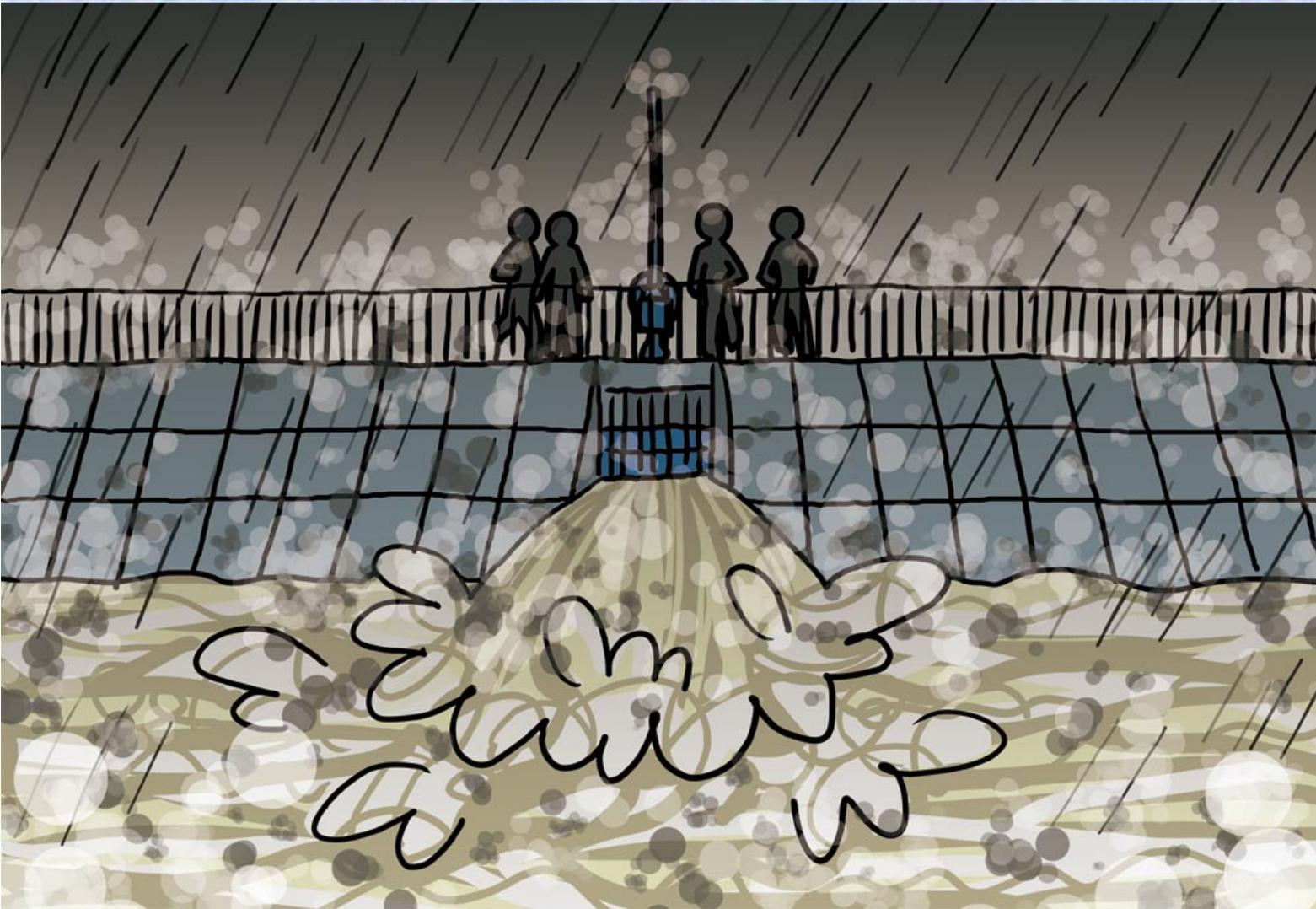
“下町と中町の住民の皆さん。  
宗呂川が氾濫する恐れがありますので、  
急いで近くの避難場所に  
避難してください！！”



明け方ですし、  
大雨の音で放送に気が付かなかった人が  
いるかもしれません。

“避難して下さいーい！！”  
“この辺りが、水に浸かる恐れがあります。  
早く、逃げて下さいーい！！”

私と3人の消防団員は、  
宗呂川の水が逆流しないよう  
水門を閉めに向かいながら、  
各戸に避難を呼びかけました。



しかし、水門まで来てみると、  
町内の水路を通じて、  
大量の水が宗呂川に流れ込んでいたのです。

私達は、水門を閉めるのを諦めました。

水門を閉じてしまうと、  
水が町内を通る水路から溢れてしまい、  
むしろ危険だったからです。



私は、消防団員と一緒に  
地区内の全戸一軒一軒を回り、  
避難を呼びかけました。

高齢者や病気の方など、  
自力で避難が難しい人は、  
背負って避難所に運びました。

どんどん水位が上がり、  
床上浸水になった家もでてきました。

まだ辺りは暗く、  
大雨と稲光の中での避難は、  
人力だけが頼りでした。



その内に、  
上流から流れてきた流木や、家財道具などが、  
橋に引っかかりはじめ、  
川の流れをせき止めてしまいました。

そして、ついに……

**バッシューン！！**





夜が明けて、辺りが明るくなってきましたが、雨はまだ止む気配はありません。

私達は、再び町内へ見回りに出ました。

“誰か、残っている人はいませんかー？”

水位は、首のところまで来ていました。溝などに落ちてしまわぬように道の真ん中を歩きながら、流れてきた3～4メートルもの竹を使い、玄関や窓をノックして、取り残された人がいないか確認していきました。



地域の人々が助け合って避難をしたおかげで、  
突然の大災害にもかかわらず、  
犠牲者は1人もいませんでした。

私達の地区では、  
災害の恐ろしさを語り伝え、  
また、助け合うことの大切さを忘れないため、  
この集中豪雨が起こった9月6日を  
「防災の日」と定め、  
毎年避難訓練を行っています。